
名探偵コナン最終回～蘭に俺の本当の声で本当の言葉で～

落ちぶれた天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名探偵コナン最終回～蘭に俺の本当の声で本当の言葉で～

【著者名】

N4458Y

【作者名】

落ちぶれた天使

【あらすじ】

事務所で暇していたコナン。

そこに1本の電話がかかってくる。

プロローグ

俺は高校生探偵工藤新一。迷宮なしの名探偵。そんな俺があるひ幼稚園で同級生の毛利蘭と遊園地にあそびにいって、黒ずくめの男たちの怪しい取引現場をもくげきした。取引を見るのに夢中になつていたおれは背後からちかづいてくるやつらのもうひとりのなかまにきずかなかつた。俺はその男にごくやくを飲ませれ、目がさめたら体がちじんでしまつっていた。組織に工藤新一が生きていると知れたる、また命をねらわれまわりの人間にも危害がおよぶ。はかせの助言でおれは正体をかくすことにし、江戸川コナンとしてらんの家にこりがりこんだ。

そして、いまだ組織のしつぽはつかめず、この体になつてしまつてからもう半年ほどたつ。

「あーあ。あいかわらず依頼がこねえじむしょだぜ。」

コナンが暇そうな顔をしてつぶやいた。いま蘭は園子とスキー旅行。おつちゃんはあさから麻雀をしにいった。

プルルプルル

「ん？電話」

プロローグ（後書き）

はじめまして。落ちぶれた天使です。今回初投稿です まだすつごく未熟で下手ですけどよんでもくれたらうれしいです これからもがんばります

一本の電話（前書き）

いんばんわ

一本の電話

電話だ・・・。

コナンは受話器をとつてつけたえた。

歩美からだつた。

どうやらこまいる銀行が強盗にあつてこるとこつ。

こなんはすぐかけつけ

見事事件をかいつけした。

テレビ局のインタビューやつたところとぞ

灰原はうつかりフードをかぶるのをわすれていた。

ジンにみられてもしきりに・・・

じんはにかつと笑うと、

あがせていにむかつた

そう、さつげない一本の電話のせいで・・・

そのあたりがない一本のぐんわのせいで

新一のうんめいの歯車がまわりだす・・・

一本の電話（後書き）

でわまた次回

心の病気（前書き）

こんばんわー

今日、2回目のとつじつです かけるだけこれからもかきまーす

心の病氣

雪がちりちりふるなか、灰原哀はいまの家、つまりあがれ亭にむかつていた。

哀は時計をみると、

『19時32分……銀行強盗にあつてからそれから2じかん半……』

と、心の中であれやいた。

じまじま歩いてこるしきあがれ亭がみえてきた。

門を開けて家の中に入らうとするが、つしまから車がまじまじまへくる音がした。

哀は、ふりかえったとき、その場で「ひ」けなくなつた。

やつ、そこにはジンのポルシェがとまつっていたのである……。

逃げようとしたときにまわつねがつた。

後ろから、睡眠薬をかがされ、

哀はその場で力をつしなつてしまつた。

たまたまセレニ歩美があが毛博士に探偵バッジの電池がきれたので

わたそうとしてとおりかかつた。

歩美はやつひこみつかるまえにみをかくした。

そこで、哀がポルシュのせられつれさられる所を

心臓がとまつてしまつてやうな思い出みていた。

哀がつれさられたあと、

歩美は、「ナンの家にいそいだ。

大粒の涙をぽろぽろこぼしながら、

ただ、ひたすらはしつた。

大切な、

友達を、

大好きでしかたない人に

助け出してもらいたくて・・・。

探偵事務所の前にやつてきたときは、

もう

涙のせいで、頬がまっかにはれていた。

それでも歩美は友をたすけたいただ一心で、

探偵事務所の階段をかけあがつた。

そしておもいつきりドアを開けた。

「おひるねにはコナンと蘭がいた。

「ナンと蘭はおひるね、

ただ、ひたすら大粒の涙をながしていた歩美に

「どうしたのー?」

「なにがあつたんだ歩美ちゃん!」

と、呟ぶ呟ついた。

歩美はどうにか事情を伝えようとしたが、

寒さのせいで体はふるえ、

ないていたせいでほおが腫れて

なにも言葉に発せなかつた。

ただひたすらなくだけ・・・。

歩美がしゃべりたくても、

しゃべれないのを

蘭はみこして、

あゆみをまかにまねきいれ

肩に毛布をかけ、

涙をふき

あたたかいココアをだした。

10分ほどたつとやっとしゃべれるようになった。

そしてあらため「ナン」が

「なにがあつたんだ？」

とたずねるとわざと撞击したことを、

あゆみははなじだした。

歩美がはなしあると、

蘭はおおこしきで警察に連絡し、

「ナン」はFBIのジヨーディ先生にれんらくした。

それからジヨーディ先生が毛利探偵事務所に到着すると

「ナン」はジヨーディの車に乗り込んだ

「鎌守番なんてしらねない。歩美もこへー。」

「ダメだよ。歩美ちゃん。きけんあれるー。」

「で、でも、哀ちゃん、哀ちゃんは私の友達だもんー。」

ひっしゃがつたわつてぐるの皿葉をそこへコナンはひつ笑つと

「しゃーねーなー。つれつれいやねよ。でもついたら歩美は車の中
にいんだぞ。」

つこでコナンも歩美のひっしゃにみかねてOKした。

「うふー。」

話がまとまるべ、コナンと歩美はジヨドーの車にのつこんだ。

「ジヨドー先生。灰原のねーさんが殺された倉庫について。あそこ
があやしことおわづんだ。」

コナンは運転席にのりだしていった。

「OK。ここわ。あれとあれのトと、あの茶髪の少女。やあんとま
もつてあげるのよ。」

ジコトトイはここおわるとヒツカツヒツカツのまをだした。

それにたいしてコナンは、しんけんなひょいじょいで

「うそ。やうやう。」

とこつた。

～灰原哀がいるところ～

「え？」

哀が目をさました。

哀が起き上がつた。そしてふとさつき起しつたことを思い出した。

『そり・・・そしきに変なくすりをかがされて・・・』

それからジンの不気味な笑みをおもいだした。

そのとたん、哀は体をふるわせて、ぎゅっと体をすばめた。
あとでおもいかえしてみると、

気が気じゃなかつた。

いずれここにジンがきて殺される・・・・

『わかつてたのにね。組織をぬけたじてんでこれくらい・・・わか

哀の頬から一粒の大きな水滴がポロリとおちた。

今までのつらがどどんとみなみのつぶになつてしまつた。

お姉ちゃん

みんな

工藤君・・・

『私のせいでみんな殺されちゃつ・・・』

そのとき良は心がすつからかんになつた。

自分では今まで必死にクールにみせていたけれど

私には、むりね・・・

心の病気（後書き）

こんばんわ～～～

今回のは歩美も哀ちゃんも

とても切ない気持ちになるはなしです～～

最後の哀ちゃんの言葉は、

哀ちゃんの悲しい心のさけびついで切なくかきました～～

次回はまた哀ちゃんの話です～～

灰原哀心身ともこの救出（前書き）

こんばんわー w またまた投稿
今日は徹夜でかこーと思います w
でわいってみよー

灰原哀心身ともこの救出

「ついたわよ。」

ジョディがふるびた倉庫の前で車をとめた。

「ありがとう。ジョディ先生。」

「ナンが」 そういつたとたん、ケータイがなった。

「あ、電話・・・。」

「ナンはケータイの通話ボタンをおした。」

「もしもし。」

「ナンがそうこたえると、ケータイから哀の声がきこえてきた。」

「く、工藤くん？」

「ナンはせどなつからくへりこ大きな」
とで

「は、灰原かー?」

と、2秒もたたないうちに」
たえた。

それにたいして哀はおちついたよつすで、

「ええ。いま、おねえちゃんが」
りされたそつ」の2階に監禁され
てるわ。まづからは木がみえる・・・。」

哀はひりしに冷静をよそおつた。

心のなかでは恐怖でこわいなのをおもえて。

「ナンは落ち着いた声になり

「わづか、いますけてやつからまつて。」

といい返事もまたずくに電話をきつた。

それから「ナッシュセセヒのせると

倉庫の窓をのぞきこんだ。

哀がいふことを確認すると、窓をあけたといふ

中にはいった。

「大丈夫か？」

「ナンは哀をみてたゞねた。

哀はしたをむいたまま

「ええ。」

とこたえた。

それから「ナンは哀をせおつてジヨーティの車にもどった。

いま組織と鉢合せになるのを危険と「ナンとジニアトイ」が

判断したため、そのまま、倉庫をあとにして、毛利探偵事務所にもどり、

あゆみもふくめ、袞は探偵事務所にじばりねとまつりとしなつた。

あゆみもしかしたらやつて顔をみられていたかもしれないのと、

とつあえず「ナンのねばりとこなつたのだ。

学校は探偵事務所からかよつこになり

歩美の母には、長期間の介護とつたえられた。

「組織のやつらがいる倉庫へ

わざわざ、「ナンたちがあとにした倉庫のかんきそべやのまへには

ジンがたつていた。

「またきえやがつたな。シェリー。」

と不適なえみをつかべじんがタバコをふかしている。

「うう。どうしゃす？あにゃ。あの女には、例の薬を完成させても
らわなくちゃならねえんですぜ。」

ウォッカがこわばつた表情でいった。

「ああそのうちもひとつある。あいつのまわりの誰かを殺すつて
おじせばやはつは簡単」こひへてへる。

ジンがいった。

するとウォッカがやりと笑みをつかべた。

（毛利探偵事務所）

「だいじょ「うふ？」むかつたでしょ「うへ」

蘭が3人の肩にもづふをかけ、あたたかいココアをいたれた。

歩美はこっけり笑い

「うんーでももう大丈夫だよ」

と、いつもかわいらしげに顔でいった。

一方、哀はつんともすんともいわず、ココアを飲んでいた。

蘭にはゞいづむ、LJの顔が、とてもかなしげにおもえた。

なにもかもすっからかんになってしまったよつたな、悲しい顔。

そして、一番感じたのは、

苦しみや悲しみを全部じぶんでせおこじんでいたよつたな顔であるLJ
と・・・。

灰原哀心身ともこの救出（後書き）

えつとへんなとこでおわづてすいませんー

#ハートのかき (繪圖)

すこせせりのめのことが、ついでおわったんで、れこしうりへじのめのひづかわます。

まつてゐから

蘭はついに口を開いた。

そしてその優しい目は哀のことを使ひしきみこんだ。

「なにかあつたの？哀ちゃん。」

哀は驚いた様子で

「え？」

と返した。

それから蘭は優しく笑うと、哀をだきしめ、

「大丈夫よ。哀ちゃんはみんなに必要とされてるわ。この世にいなくなつていいい人なんていないんだもの。たとえそれがどんな人でも。・。人は、神様がくれた、ひとつひとつなみがちがう宝箱。宝物なんだから。」

蘭の優しくて、純粋なその心にふれ哀は、姉の宮野明美のことを思い出した。

哀はすこしだけやさしく微笑んだ。

それから蘭のほうをむくと、

「あなた、いい母親になれるんじゃない。」

とほほえみながらいった。

それをみていたロナンも、やさしく微笑んでいた。

～まつてゐから～

5月1日

歩美のかわいらしげ声が毛利探偵事務所にひびきわたった。

「蘭おねーちゃん、おじーくん。学校いってきまーす。」

「こつてらつしゃーい。」

蘭もにっこりしてコナン達にてをふつた。

3人は探偵事務所をでると学校にむかって歩き出した。

学校について教室に入ると、それぞれ自分の席にむかつた。

ふつーに授業をうけると、もう下校時間だった。

今日はなにもないのでたつたといえにかえつた。歩美は蘭と買い物にでかけていて

哀は散歩。

おつちやんは浮氣調査でふざいだつた。

「さあ、おまえ、おまえと蘭と歩美がかえってきた。」

「だけどここまでたつても家にまだいなかつた。」

「ナンが哀のケータイに電話をする？」

「おつといつがあつた。」

「今どきでるんだ？」

「組織の倉庫よ。」

「なんでもなんど？」

「散歩の途中、ジンにあつてね、知り合ひを殺されたくなかったら、組織にもどつて薬の研究をすすめられて。それで、要求をのんだつてわけ。」

「バカヤロオー！ なんでそんな要求を。」

「私は、ただ要求をのんだんじゃないわ。とつあえず時間をつぶつただけ。あなたがここにくるまできながこまつてゐるから。たのんだわよ。じやあ。」

やつここのじゆと喰はこつせぬひしきに電話をきつてしまつた。

口ナソはしづらへかんがえいむと、

「#つてつよー。」

とこゝとカーティをおいた。

まつてゐかり（後書き）

このやつはよつとつまらないかも・・・でもまあかんべんしていく
だよこへへ

スラムタウンのへ。(福井)

いじめさんわー それがこいつらのよー

5月2日

いま、蘭はコナンの追跡めがねをコナンが寝てこる間に、もちだし、バッヂの発信機をたよつて、

こつまでたつてもどうなり、哀をわがしていた。

つこに蘭は哀がこる、倉庫にさつてきた。

「こ、こ、こ、哀わざんがこるのね・・・」

やつてからやべて、じらしきをわむとひめつした。

そのとお純こおどがして、蘭は、わむに気が遠くなつた。

そしてそのばまでわをひになつてしまつた。

そのすぐ後には鉄パイプをもつたウォッカと煙草をふかしてこる、ジンがいた。

『新一、新一。』

蘭が太田をさました。

「えいえいえ。」

セイはゼンかの森のなかのようだつた。

「じーして私がこなとこに。」

そのと頭に激痛がはしつた。

「いたつ」

園激痛でせつをねじつたことを蘭はすべて思に出した。

「わっか。私あのとわづかうからなぐられて……と、とにかくこのとをね父をこなつ。」

やうこいつと蘭はケータイをとりだし事務所にでんわをかけた。

でたのは「ナンだつた。

「ビーしたの。 らんねーちゃん。」

「あ、あのね、袁ちゃんが麻になつてももどりないからしんぱつになつて、口ナソくんの追跡メガネで袁ちゃんを、さがしてたの。」

「えー？」

「それでね。急いでしろからなぐりねて私、それをひしめきつけて。
・。・。」

「それでこまばらにいるのー?..」

「ビーかのむつよ。でも、ビーだかは・・・。」

「だいじょーぶ。ケータイのジーぴーえすですぐやつらがおじゆる
といつかぶ。じゃあまつてしてね。」

「ええ。」

そういうと電話が切れた。

そのとあらと蘭はおもつた。

新一、新一なら哀ちゃんも私もかんたんに・・・

簡単に、

たすけてくれるの?・・・・・

ビー、ビー、こいつちやつたのよ・・・・・!

新一・・・!

本当に、あなたはいまだにここなの?

なこをして、

何を食べ,
、

わらうてるの?

そして、

もう、会えないの?

あなたはいきてるの?

あなたは私がいなくてさびしい?

私はさびしいよ。

ないともないても

とてもおさえきれないぐらに・・・

新一・・・

私はあなたのこと大好きだよ・・・?

あなたのことは

忘れない。

ぜつたいに・・・。

まつてるからね・・・

まつてる・・・

まつてるよ・・・

蘭が静かにめをとじた・・・。

「おはようございます。」(後書き)

このみなさんは蘭ちゃんの苦しみがつたわってへんつかきました。
これからもがんばりーとおもいます。わわわ

灰原心（前書き）

「んばんわんわんそくいってみまーす」

「蘭ねーちゃん。蘭ねーちゃん。」

「え？」

「やつと田がさめたんだね。よかつた。僕お医者さんよんでもへるー」

「え、
ナニか。
」

そういうと、コナンは病室をでていった。

どうやらここは病院みたい・・・

蘭はまだきりきりと傷む頭をおさえおきあがつた。

「いたゞ。私は、いつのまにかねちゃつたみたい。」

コナンが医者をつれふたたび病室にはいった。

「 もう大丈夫でしょう。 されなら、 明日には退院でもまあよ。 」

医者が言つた言葉に小五郎は田の色をかえ

「 らーん。 本当によかつたつー。 」

とらんにだきついた。

コナンもほつとした様子で、 蘭をみていた。

～そのじゆは～

こんなくらくてケータイとパソコンと食料と実験道具しかないなんて

いやね。

たまにかかるべルジンからの電話は、

薬の開発をいそげつて」とばつか。

工藤へんなむせんばはなことひいて電話してこなすこといろをみると

まだなにもしておしてないのね・・・。

たぐ、あのホームズ氣取つのが探偵さんほつたいたいなにせつてこの
よ・・・。

せやべてがかりつかんでこなつあみわることいから

開放してよね。

たく・・・。

灰原心（後書き）

きょ「みじかくてすいませんつ

つきながくかくんで。でわ w

今回もいってみよー

W

学校の帰り道・・・

「おー、今日、博士んちでゴーもやるうぜ。」

元太がにこにこしながらいった。

それにたいしてみつひこと歩美もにっこりしながら

「いいですね~」

「やあやあ~」

といつた。

よじ「ナンンもやしくわらいながらみまもつていた。

ペニコペニコ…・・・

「ナンのケータイがなつた。

ジョディ先生からだつた。

「ナンはケータイの通話ボタンをおあと、

「ビリしたの?..」

ときこた。

「ちよつちよつど業があわつたこしから?..」

「うそ。で、ビリしたの?..」

「ちよつとクールキッズに話したいことがあつてね。今、あがささんのお家にこらえてくれる?..」

「いいんだけど、あこつらもこつしょでいい?..歩美ちゃんは帰るば
しょがこつしょだし、あこつら、いまから博士んちでゲームやるつ

てはうしゃこじでじ。」

「いいわ。かえったら、研究室にきてくれる?」

「わかった。じゃあまたあとでね。ジヨーティ先生。」

「ナンはやうこじと電話をやつた。

ジヨーティと電話してくるひびきもアガサ博士たちのものとえにき
ていた。

中に入ると、歩美たちが

「ゲームやねい。」

「やーばーばーせ

「みんなでやつましょ。」

とこつてゲームをしだした。

「ナノせりごどせぬをねへと地ト風におりていつた。

あとからほかせもおりていつた。

ちかしつのどびりをあかると、ジョーティがまつていた。

「で、なにがあつたの？組織のことなんでしょう。」

「ええ。まあ。昨日、水梨玲奈から電話があつてね。」

「どんな電話なんじや？」

「ジンが、ある死んだはずの人物をロンドンでみたつて。それで組織は今園人物をさがしてゐて。だからきをつけつて。」

「あやかそのじんぶつつて……」

「高校生探偵の工藤新一よ。」

「かーぜんぶおれのせえじやんかー」

「えいこじゅうとー。」

「ナンは事情をすべて話した。」

「へえ。わかったの。」

続く。・・・

江戸川コナン誘拐事件（繪書卷）

今日のせせらぎが静かです

江戸川コナン誘拐事件

ジョディ「やっぱりそうだったのね。」

「ナン」「え？」

「ナンが不思議やつにジョディにいった。

ジョディ「だつて、どうかんがえたつて、小学一年生の頭脳じゃなもの。私たちも」してゐるし。」

「ナン」「へへへへへ……」

「ナンが「まかすよ」てわらつた。

ジョディ「じゃあ私はかえるわね。みんなにこつそり護衛をつける準備をしなくちゃいけないから。」

「もちろん猫にはわたしが……」

ジョディがそういうかけたとき、コナンは笑いながらいつた。

「ナン、『まへせここ』。」

ジョディイ「え、なんで…?」ちばん危険なのはクールキッド、あなたなのよ。」

「ナン」護衛なんてついたり、逆に正体ばれちゃうよ。」

ジョディイはすこし不満げな顔をしてあがれ顔をでた。

それにつづき、「ナン達も家をでた。

歩美「ナンくんバイバーイ」

「ナン」おひ

もう二つと「ナン」はひとつになつた。

そのあと「ナン」は藤邸にほいつた。

「ナン」「とまあえず、掃除すつか。ずっと、俺の部屋とか掃除してねえし。」

そうこうと、ロナンは掃除機をかけはじめた。

— そのじる組織では—

ジン「工藤新一……まだみつかねえか?」

ジンがウォッカにたずねた。

ウォッカ「へい……まだ……」

ウォッカがそうこうとジンがたちあがつた。

ジン「工藤邸だ。工藤邸にいくぞ。」

ジンがそうこうと、ウォッカはにんまりとして車をだした。

ジンとウォッカがそういをでいくと、

隣のへやで、ささみをたてていた、哀はうづけなくなつた。

それから哀はケータイに震える手で、

今あつた出来事を入力して、メールをおくつた。

倉庫から工藤邸までは10分かかるない。いまメールを打つのに、7分はかかってしまった。

—その工藤邸では—

コナン「ん、メール? げ、灰原からだ。」

コナンはやうじうと、ケータイを見てにとり、メールをみた。

メールを見たとたん、コナンは青ざめ、まどろみとみた。

ジンのポルシェがこちにむかってはしつてきている。

コナンはあせると、

「ナン、やつべえ。」

ところで、上藤ていをでて、スケボーをとりました。

もちろん、上藤邸から、スケボーを、あんな華麗にのりこなす、子供がでてくるのをみのがしあしない。

ジンは車で「ナンを追いかけた。

ジン「小僧をついー。」

ジンがそうこうと、ウォッカは窓から銃をだし、「ナンをそげきしよつとした。

だが、「ナンはそれを軽々かわした。

そのときだ。

「ナンのスケボーの車輪がうたれた。

「ナンは当然じるがおちた。」

ジンの車の「ひしろか」、

もう一一台車がでてきて、窓から銃をつきだしている。

そこから顔をのぞかせてこるのは、

キャンティだつた。

コナンが落ちたのを見たジンは車をとめ、

コナンの肩をそげました。

痛みでコナンはその場から「ひしろか」がなかつた。

ジン「きていたのか、キャンティ。」

キャンティ「ああ。」

やつ言葉を交わすと、ジンとカオックはコナンに向かって近づいた。

コナンはまだ痛みで「び」けなかつた。

そこにやつてきた一人はコナンの腹を足でけつた。

コナンは氣を失つた。

氣を失つたコナンを見ながら、ジンがいつた。

ジン「こいつを組織の地下の監禁部屋にぶち込んで。あとで、尋問していろいろはかせる。」

ウォッカ「へい。あにき。」

それから、ウォッカが車の後部座席にコナンをほりこんだ。

ジンも車にもどりこんだとき、

ジンは、じつとみつめるような視線をかんじた。

ふつむくと誰もいなかつたのでジンは田畠ははたせたし、まあよしとつよつと、くるまにのつて

キャントイヤや、ウォッカとともに工藤邸のまえをはしつせつた。

そのとき、視線をはなつていたのは、歩美達だつた。

3人はもつぼろぼろ涙をながしていた。

歩美「コ、コナン君……」

光彦「と、とりあえず、け、警察に電話しましょう……。」

元太「お、おう……」

そういうと光彦はケータイをてにとつて、震える手でボタンをおした。

警視庁「はい。じゅり、警視庁司令室。」

光彦「あ、あの、めぐれ警部おねがいします。」

めぐれ「はい。めぐれ。」

光彦「め、めぐれ警部・・・」

めぐれ「おお。光彦君。どうしたんだい？」

光彦「じ、じつは、口、口ナン類が、銃でうたれて、ゆうかいされたんですね。」

めぐれ「なにー？それは本当なのかね？」

光彦「本当にきまつてゐるでしょー。」

めぐれ「で、君たちはこまびらこいるのかね？」

光彦「あがさ博士の家のまえです・・・」

めぐれ「わかった。すぐいくから君たちはあがせさんの家でまつてなさい。」

光彦「はい・・・」

そういうと電話は「きれた。

光彦たちはとぼとぼ泣きながらあがさ博士の家に入つていった。

江戸川コナン誘拐事件（後書き）

でわまた

江戸川コナン誘拐事件？（前書き）

わあこつてみよー

江戸川コナン誘拐事件？

—15分後—

ピンポン

あがさ「はーー」

めぐれ「子供たちは？」

あがさ「一応あつた」とは話してくれたんじゃが、なきやまなくつてのね。」

佐藤「無理もないわ。田の前で友達が撃たれたんだから。」

そういうと、あがさ、めぐれ、高木、佐藤、白鳥は、歩美たちのところまでやつてきた。

あがさ「ほれ。けいぶさんたちがきてくれたぞ。」

げんた「めぐれ・・・警部

めぐれ「なにがあつたか、はなしてくれるかい？」

歩美「う、うん・・・。」

光彦「ぼくたが、ヒルまで、かえったんですけど・・・。」

元太「おれが、はかせんちにわすれもんしちまつたことおもいだしてよお・・・。」

歩美「それを、私たち、はかせんちことつこじりひつておもつて、はかせんちにもどりうとして、」

「はかせんちのまえのまがりかどまできたら」

光彦「コナンくんが黒い車においかかれてるみたいで怖い顔をして、スケボーをとばしてたんですね・・・。」

元太「俺たち、ひかれそつになつたまつてよべ、でんづるひばしまじりにくつついたんだよ。」

歩美「そしたら、その黒い車、まづから銃をだして、コナン君をひ

とつとしたの。」

元太「そのときはまだ弾あたんなかったんだけどよつ・・・」

光彦「いきなり、後ろからもつこちだいぐるまがでてきて」

歩美「そのくるまにのつてたひどが、まどから、銃をだしてね、コ

ナン君のスケボーの車輪と、」

「コナン君の肩をうつたのよ・・・」

元太「そしたらよ、黒い車にのつてた、やつらがでてきて、コナンの腹、けつたんだよ!」

光彦「そしたらコナン君、きをうしなつちゃつたみたいで・・・」

歩美「歩美、こわくて、目ふさいでたんだけど、黒い服着た人たちが、」

「組織の、地下室に、ぶちこんでけーとか、尋問して、いろいろ吐かせるとかいってたの・・・。」

めぐれたちば、スケールのすじにむづきをかくせないでいた。

千葉「けいぶー。ひょとこいつたじり、」
「おひてました。」

そのスケボーは見事に車輪をつりぬかれていた。

めぐれ「かんしきいそげー」

「私達は今日はこれで失礼します。子供たちもつかれているでしょ
うし・・。では。」

そうこうとめぐれたちはあがさ邸をでていった。

一 やのじゆの ハナン

ハナン「ん、おれきぜつしてたのか?」

ハナンがおきあがつた。まだはらがきりきついたんだ。

ハナン「ぢーだー。」

ぢーが狭い地下室のようだつた。その瞬間、ハナンはわいわいと
たことをおもいだした。

体はささいわいしばられていなかつた。

ジン「おめざめか？工藤新一？」

うしろからジンのこえがした。

ふりむくとジンとウォッカがいた。

江戸川コナン誘拐事件？（後書き）

つづくのだ・・・
W

江戸川コナン監禁事件（前書き）

タイトル、誘拐から、監禁にかわったぞよ

「ナン」「ジン、ウォッカー？」

「ナンがおどろいて立つた。

「ナン」「クソットイリは組織の一？」

ジン「いや名答……。まさかガキの姿になつてこあつたとな……。

「

「ナン」「灰原は？」「シロニーはどつしたー？」

ジン「やつなら、違う倉庫でベルモットといふ……まあ、じわじわくくるだらうが……。」

「ナン」「で、俺をどつたつだー？」

ジン「さあな……。まあはお前の身体検査からだ……。ウォッカ

「」

ウォッカ「へい兄貴！」

そういうとウォッカはコナンの体を調べ始めた。

そしてケータイ2つと、探偵団バッヂをコナンからうばった。

ジン「まあ、しばらくお前にはここにでじつとしどこでもうり。もうすぐベルモットとシェリーがここにくる。」

「それまで念佛でもとなえておくんだな。」

ジンがせつじと、ウォッカがコナンの体をきつくロープでしばった。

コナンをしばりあげたあと、2人は地下室をでていった。

江戸川コナン監禁事件（後書き）

やほー w アクセス数なう

江戸川コナン監禁事件？（前書き）

アクセス数やばつ ～みんなさんのおかげで～
これからもがんばるなつ

江戸川「ナン」監禁事件？

—組織の地下室—

「ナンはとうあえずベルモットをまつ」とした。

地下室は狭くてくらぐ、灰原の気持ちがわかつたきがした。

「ナン」「おっせえなあ、ベルモットと灰原。あれ？でもなんで灰原までくるんだ？」

そんなことを考えてこるひがこ、地下室の扉があいた。

ベルモットが入ってきた。

「ナン」「あれ、灰原は？」

ベルモット「シヒリーなら上の研究室、ここにしかない、資料をみてるわ。」

「ナン」「だからあこつもあたのか・・・。」

ベルモット「私はあの『のみはり』と、キャンティとコルンがかえつ
てくるまでのただの見張り役よ?」

「ナン」「キャンティとコルン? 奴等もいるんのか!...?」

ベルモット「ええ。 そうよ? 驚いた? 私のいとしのシルバー・ブレッ
ヂ君?」

「ナン」「あいつらスナイパーだろ? なんで、俺のみはりなんかに?」

ベルモット「いろいろあつてねえ。 組織で人の手配がまにあつてな
いのよ。」

「それにあなたにいろいろ聞きたいことがあるみたいよ・・・?」

「ナン」「聞きたい」と?」

ベルモット「それとね、私がわざわざ『のみはり』と
理由があるわ・・・。」

「ナン」「理由?」

ベルモット「ジンから命令であなたにしでかすかわからないからって、睡眠薬をのませろっていわれてね。」

「うごうとベルモットはポケットから麻酔薬をとりだしてコナンに麻酔薬を撒しながら、

ベルモット「飲む?」

「あこた。うがさん」なんも

コナン「んなもんのむわけねえだろ」

とかえした。

そのときベルモットがコナンのあいをつかみむりやり睡眠薬をコナンのくちに撒してしまった。

「コナンがねむったのを確認すると、ベルモットはやつていった。

江戸川コナン監禁事件？（後書き）

身じろぐたすんませんなり・・・><

江戸川コナン監禁事件？（前書き）

昨日みじかくてすいませんなつーーー！

今日はばつぱりがんばるなつーーー！

江戸川コナン監禁事件？

キャントレイ「これがあの上藤新一？」

キャントレイの声がきこえてきた。

コナンはゆっくりと目を開けた。

そこにはもうベルモットの姿はなくかわりにキャントレイとコルンが
めさびくわざうにたつていた。

キャントレイ「おめざめのようだね名探偵？」

コナン「キャントレイ、コルン！」

キャントレイ「あら、あたいうのこともけっこいつかんでるようだね

！」

「コルン、おれ、狩りにこきたい・・・」

キャントレイ「あんたはだまつてな・・・」れもあの方の命令だ

コルン「の方・・・わかつた・・・」

コナンはまだくらべらする頭をおさえながらおきあがつた。

知らなこつけひ kojebi

キンティ「さあはいてもらおつか、あんたの体がちじんだことを
しつている人物を?」

そうこいつとキンティはコナンの頭に銃をおしつけた。

コナン「そんなやつ、いなこせ」

コナンはあわてる」ともなく、平氣な顔をしながら、こたえた。

それにキンティはすこしづかりきれたらしく、

舌打ちするとコナンをけとばした。

それから『ナナ』はここにいたえなかつた。

おかげでかられたりなげとばされたり銃で足をかすめられたり全身
まみれになつた。

しばらくしてからギャントトイは一〇分後またはなしをかへつて
やとこでてこつた。

『ナナ』のチャンスをのがしわしなかつた。

へやはあつたがこねな換氣口から『ナナ』はとこでた。

『ナナ』「ふーとつねえずだしあつしたはにこせんねかうじうか
だ?」

「ケータイとらねちまつたし……。ひとつねえず交番にかけいむか
ー」

『ナナ』はいつもととじるが、いたむといのをがまんしながら交
番にやつてこつた。

プルルルプルルル

博士のうひの電話が鳴った。

少年探偵団はこっけに電話に注目した。

あがさ「もしもしあがさです。」

めぐれ「おおあがせさん、コナンくんがけいされた。いま警察病院で手当をうけてる。」

「悪いがすぐきてくれんか?」

あがさ「ほんとかー? よかつたよかつた。いますぐ子供たちをつれて病院にいきますーーー!」

やつこ「電話がきた。」

あがさ「みんなーー! コナンくんがみつかったぞーー!」

歩美「ほんとーー?」

光彦「ほんとですか！？」

げんた「まじかよ！？」

あがさ「ああ。いま警察病院で手筋をうけていたのね。さあ、きみが
もこくかね?」

歩美「いくいく……！」

光彦「いきます！－！」

「そつこつとあがさはかせたちは警察病院にやつてきた。」

がらがら

病室のどあがひらいた。

歩美「「ナンくんーーー！」

光彦「ぶじだつたんですね！？」

げんた「コナン～！」

コナン「おまえら！」

コナンは頭とかたに包帯をまいていた。

今日もちよつとみじかい？なうー。

疑い（前書き）

今日2回目なう

疑い

めぐれ「さうそくだがコナンくん。なにがあつたかはなしてくれるかね。」

「コナン」「うん。僕、つれさられたあと、変な工場の地下室にきついたら監禁されてたんだ。」

「それで、誘拐犯がいなくなつたときにはちこちな換気口から脱出したんだ。」

めぐれ「歩美君たちが、君をつれさるとい、誘拐犯が尋問するといつてたらしいが、」
「尋問されたのかい？」

「コナン」「あ、えと・・・・だ、大丈夫ーと、されてないよーへへへ・・・・」

「コナンは苦笑いをした。

そんな「コナン」を一回は唖然とした顔でみた。

「コナン」「え・・・・？」

元太「コナン・・・おめえほんと嘘つくのへただな・・・」

コナン「え、う、嘘じやないよ、やだなもう元太つたら・・・ははは～」

光彦「幼稚園児がみたつて一発でわかりますよ・・・嘘だつて・・・。」

歩美「コナンくん・・・。」

佐藤「コナンくん。本当のことはなしてくれるかしら?」

コナン「あ～いや、その・・・へへへ・・・。」

高木「コナン君・・・。」

コナン「う、嘘なんて僕がつくわけないじゃない?」

歩美「もうあきらめなよ～」

元太「そつだぞ「コナン」！」

佐藤「それとも、いえない理由でもあるのかしら……？」

「コナン」「え……」

高木「そつなのかい？「コナンくん。」

光彦「そつなんですね！」

「コナン」「な、何いつてんだよ～みんなして～俺がうそつくよつこみ
えるか～？」

「一同は声をやられて」いつた

『みえる……』

「コナン」はあ～。」

「コナン」「はあ～。」

それからコナンは子供のよつな顔をすり、

コナン「はなぐくや、やひる、だめ?」

ときこた。

また一回せりえをやひるがつまつと

『だめ……。』

といつた。

コナンはもう一度ため息をついてからこいつた。

コナン「されたよ? これだけじゃ……だめ?」

光彦「ダメです……! それだけじゃなんで誘拐犯がコナン君をやつたか分からないでしょ? ……」

佐藤「そりゃ。コナン君、もつとくわしへおしえて貰えるかしぃ。」

「コナン、じ、実はわすれちゃったんだーほら、僕「じどもだからーー。」

「また一同が睡然するなか、あがさはかせが苦笑いしながらコナンをかばつた。

あがさ「ま、まあコナン頑もつかれてる」とじやうりつし、事情聴取は、また今度つことでじじゅーー。」

めぐれ「や、そうだな。じゃあまた後日事情聴取をすりよつ。」

一応一同は納得したとみえたが、まだ納得していなかつたものもいた。

佐藤「なんか、あのあわて方、なんかありそつじゃない?」

高木「はい・・・。ちよつとオーバーすぎますよね・・・。」

佐藤「ねえ、高木くん。コナン君の過去について、調べてくれない?」

「私は、コナン君の戸籍調べるかい。」

佐藤「あ、はい！わかりました！」

そういうと一人は病室をでていった。

一方、少年探偵団もコナンのことをふしんにおもっていた。

歩美「ぜつたい、コナン君、なににあるよねー。」

光彦「はいーなにがあるにちがいませんー！」

元太「でもそれをどうやって引きだすんだよつ」

光彦「ぼくにいい方法があります！」

そつこつと光彦はおもちゃの手錠をだした。

歩美「で、でも、それはちょっとコナン君があかわいそつよ。」

元太「でもよ。逆にあこつのためになんじゅねえか?」

光彦「そうですよー。」

歩美「そ、 ううね……。」

あがせ「君たち、 かえるぞ。」

歩美「私達、 もうひつとコナン君とおはなししてくー。」

光彦「だから博士はわざとこかえつててくださー。」

あがせ「やうか。 くらくならないうちにかえるんじゅよ。」

やつこ「あがせは病室をでていった。」

それと同時にめぐれも病室をでていった。

やしじゅうじつは「コナン」と少年探偵団だけになつた。

すると光彦は「ナンにかけて

光彦「「めんなさ」……」

ところで「ナンの片手におもちゃの手錠をかけもつ片方をベットの
はしにくべつけた。

「ナン」「ええ、ちよつと……な」「……」

とあわてた。

そしてもう片方の手には 元太と歩美がかけよ

反対側のとと同じように手におもちゃの手錠をかけもつ片方をベッ
とのはしにくべつけた。

歩美「「めんなね「ナン君」……」

「ナンは両手がぶせがれた。おもちゃだからといつて、やつ簡単に
ははずれない。

「ナン」「お、おこーなんだよこれー。」

「ナンははずやうとして手錠をひつぱつた。」

光彦「「ナン君、本物の」とをはなしてくだせーーー。」

歩美「おねがい「ナン君ーーー。」

げんた「おれら友達だろーーー。」

「ナン」「だからなにもかくしてなーって。」

「ナンはまだ手錠をはずやうとしながらいった。」

歩美「おねがいだよ「ナン君・・・私達、「ナン君の」と、しんぱいで・・・」

光彦「灰原さんも、せらわれちゃいましたし・・・。」

げんた「おれら、友達がつきつけにさりわれて、心配なんだよ・・・。」

3人のめは涙ぐんでいた。

コナンはわらうといった。

コナン「わかった。はなしてやる。」

歩美「じゃあ！」

コナン「でもいまはまつてくれねーか？」

光彦「え？」

コナン「時がきたら、お前にすべてはなしてやるから、その時

までもうすこし、」

「まつてくれねーか？」

コナンの意味ありげな言葉に、少年探偵団一同はにっこりし、

光彦「はー！」

歩美「うんー。」

げんた「せつたいだぞー。」

とつぜんひきこった。

それからコナンは苦笑いをすると、

コナン「それと、この手錠はずしてくれねーか?」

とこつた。

光彦たちはうなずくとコナンの手錠をはずした。

一九の「ジンたちはー

ジン「ガキは死ににいった?」

ウオツカ「この換気口から、にげたみたいですね。」

「あー、」

ジン「おもしろいじゃねーか。キヤンティ、コルン、あのガキをすぐこいつかまえて！」こいつれて！」……」

ジンがいった。

キヤンティ「あいよ。」

コルン「つかまえる……分かった……。」

そういう2人は勢いよくでていった。

—そのこの佐藤、高木—

佐藤「た、高木くん……」

高木「はい、佐藤さん」

佐藤「ないのよ、『ナン君の戸籍が……』

高木「ええ……じゃ、じゃあコナン君は、いったい何者なんだ！？」

佐藤「海外の戸籍もしらべたけど、江戸川コナンなんて人間、この世に存在しないわ！」

高木「僕のほうでも、コナン君のたんていじむしょにあらわれるまでの過去をさぐってみたんですけど、いつさい、探偵事務所にあらわれるまで、目撃されてないんです！」

佐藤「いつたいどうして…？」

高木「それと、コナン君が現れた日から、姿を隠して、おときたない人物がいるんですね。」

佐藤「え？」

高木「工藤くんですよー。」

佐藤「まさか…。高木君！すぐにコナン君の指紋と工藤君の指紋をしようつづいてー！」

高木「え！？」

佐藤「はやく……」

今回おもしろくなかったなう・・・

佐藤と高木

高木「はは・・・」んな」といつて・・・」

高木刑事はコナンの指紋と新一の指紋を照合した結果をみながら冷や汗をたらしていた。

高木「し、指紋が、い、一致してる・・・!？」

佐藤「どうだつた? 高木君」

高木「そ、それが」

佐藤「一致したのね・・・まさかとは思つたけど・・・」

高木「はい・・・」

佐藤「でもビリじてあんな姿こ? しかもビリじて正体をかくしてい
るのかしら・・・?」

高木「ですよね・・・」

佐藤「やつぱコナン君に直接きくしかないわね・・・・」

一九の「」

「コナン」（しきしこれからどうすつかー？俺が気づいたらいなくなつてんだ。組織の奴等もこれこそ血眼になつて俺をさがすだろーしな・・・それに、なんか佐藤刑事俺のことあやしんでたような気がすんだよなー。」いや、いろいろ大変になつてきたなー・・・・」

「コナンはベッドに横たわりながらボーッとしていた。

次第に「コナンはねむくなり、そのまま眠りについた。

一九の「」

「キヤンティ」「たく、いつたいあのガキどもつたんだい？」

「ルン」「あいつの・・・家には・・・になかった・・・」

「キヤンティ」「となると病院だが、どうせこむとしたら警察病院だね・

・・。となるとやつかいだよ。」

「近くにサツがいる可能性がたかいね・・・簡単につれだせないよ
」

「ラン」「うそ・・・・・とつあえず、ジン」「・・・連絡・・・」

キヤンティ「ああ。そうだね。」

みじかつなう！！！

やほーなつ

復活！東の名探偵

ジン「やはつ、家にはもうじつでないか・・・」

キヤンティ「ああ。どうせ警察病院だらうよ。」

ジン「じゃあお前らとほかのメンバーであこつの家のまわりや通り
そなとこをはつておけ。」

「けがとこつてもあればたいしたけがじやねえ。すぐこいでくるだ
う。」

キヤンティ「あこよ。ジン」

「一方コナンの病室ではー

「こしゃ「うん、これだつたら明日でも退院できるだしちゃう」

蘭「ほんとですかーよかつたねコナン君ー。」

コナン「うんー。」

蘭「じゃあ明日の朝むかべにくるから、、今日はお姉ちゃん、かえ
るね」

コナン「うんー。」

セツコ「と蘭は病室をでていった。」

「ナシのまま考え込んだ。」

「コナン、（セヒビーすつか……俺のみのまわりで奴等がはってかもしけねーし、俺が退院したとわかつたらすぐ行動にでるだろーし。・・まったく、どーすりやいいんだよ……ま、とりあえずあさつての学校の帰りにでもはかせんちによつてくか……）」

「コナンはかんがえてこるうちに深い眠りについた……。

—翌日—

「コナン達はめでたく退院して探偵事務所にいた。

蘭「コナンくん、晩御飯なにがいい？」

「コナン「なんでもいいよー」

「コナンは必死に子供のよつてぶるまつた。

それから1時間くらいすると、

「晩御飯がでてきた。

蘭「明日はコナン君、学校だね~」

「コナン「うん」

蘭「また誘拐なんてされちゃだめよ?ちゃんと「コナン君が帰つてこられるように、ある人たちにおねがいしたから」

「コナン「ある、人たち?」

「ナンは顔をしかめた。

蘭「少年探偵団のみんなよ～」

「ナン」「えー？」

蘭「歩美ちゃんがね、ナン君が入院しているあいだに自分のつかに
かえつたじやない？ そのかえりぎわに、しせりく帰るときは「ナン
君を」」おぐつととげてくれるって」

「ナン」「まじー？」

「（あこひら、余計）な」とを～）」

蘭「ほら、」飯たべ終わつたらねやくねなせこ、明日の準備してね

「ナン」「はーこ

「ナンはナリヒトヨビングをでて布団にまぐつた。

二
つ
ぶ

まつわらた探偵団（前書き）

今日はやれこしょのじるぎとためせんやねん

じつじつ

田覚まし時計がはげしくなった。

口ナン「朝か・・・」

口ナンは眠そうな顔でおきあがる。

口ナン「ふああああ。」

口ナンはあべぎをかぶるとコピングでこいつた。

口ナン「おはよー、蘭ねーちゃん。」

蘭「おはよー、口ナン君、じー飯にしようか。」

口ナン「うふ。」

小五郎「ふあああああ」

蘭「あ、お父さん、今日、空手部でおしゃべなるから、夜じー飯はボア
口で食べてねー」

小五郎「へーへー・・・」

蘭「口ナン君も寄り道しないでかえつてくれるのよ。」

「ナン「せーい」」

「ナン達はもくもくと朝食を口にした。

それから「ナンは家をでた。

歩美「おはよう、コナン君！」

光彦「おはようございます!」

元太 - よう！ - ナン！

「十九·政治的發展」

歩美「哀ちゃんもおはよー！」

哀 - むかづく

歩美「口ナン君も蘭お姉さんからおこしてるとおもうけど、」

光彦「しばらく僕たちが」

げんた「お前を家までおくれてやんよーなすけて・・・」

3にんそろつて『コナン君をまもり隊！――』

コナンは苦笑いをした

はりきつた探偵団（後書き）

むふふ

不審者事件（前書き）

う
わ

W
W
W

学校についていた。

女子一同『コナンぐるん！』

コナンが教室にはいると、クラスの女子が一気にコナンの元へ、かけよつた。

女子A - 元気にしてたあ？

女子B「風邪？」

女子「だいじょうぶ?」

女子の「ちゅう」と、みんなおやないでよー私が「ナン痴」とお話しするのやーーー。」

女子曰「私よーーー！」

女子F 「あたしだもんつ！！」

歩美「ちがうわ！」「ナン君は歩美の将来のお婿さんだもん！..！」

ナラン
え
ちよ

コナンの取り合いで扉が混雑した。

コナンは成績学校トップで、運動神経がよくてサッカーもプロ並み。

そのうえ、きれいな顔立ちで、かっこいいときたら女子もだまつち
やいない。

ほかの学年や、ほかのクラスの女子まできていた。

それをみている、男子はもちろんいい気分ではない。

ひそかに嫉妬しながら、机に座っていた。

「ナニはそれをなんとかふりぬくか、おおれいなため息をついた。

「……………。」

灰原「あら、組織に勝手に誘拐されといで。誘拐しにいつたことをしらせた私にはなんも礼はないのかしら？」

「ナン「んな」」と二つたつてよお・・・。て、え・・・?」

灰原「なに?」

灰原「なんのよ、いきなり叫んだりして。」

「ナン「な、な、なんでオメーがーーーいんだよー?」

灰原「ああ。あなたにはいつになかつたわね。あのあと、ベルモットがにがしてくれたのよ。まあ、正確にゆうと、川におとされた。

つてほうがたらしいかしら?」

「ナン「ベルモットが?んな」」とした」ことせねたりあこひじれね
ちまうだらー?」

灰原「さあ? どうかしらね。彼女はあなたの」ときにいつてゐた
いだし。」

「ナン、それよりお前、 irgendwie だいじな ぶなのかな？」

灰原「どうかしら？でもしいてゆうならより危険なのはあなたね。警察に親密な関係をもたない私とちがつて、あなたが警察と親密な関係であることは明白。となると私よりまずはあなたのことを組織は優先するでしょうから？せいぜい気をつけるのね。」

「ナン」「あ、ああ・・・。」

小林「はい。みんな授業はじめますよ。」
一同『はい』

「ナン！」（たぐい）んな中じや考えられもしねえよ……」「

小林「小島く～ん。3+8は？」

げんた「えっと、えっとねえ・・・10-.-.」

光彦「もちろんです！答えは1-1です！！！」

小林「せいいかいつ！」

放送『緊急放送、緊急放送、1階の図書室で水漏れ事故が発生しました。児童は教室と窓の鍵をしめ、担任の指示に従つて行動しない。避難訓練ではありません。くりかえします・・・』

小林「みんな！教室のドアとまどをしめて！はやく！」

児童A「さやーー！」

光彦「確か、水漏れ事故つて、不審者が侵入したつて意味ですよね・・？」

歩美「う、うそお・・・」

げんた「まじかよお・・・」

小林「みんな、おちついて！私のほうにきなさい！」

灰原「なんか大変なことになつたわね・・・。」

コナン「ほんと。世の中事件がたえねーなー。」

歩美「二人とも・・・」

光彦「おちつきすぎです・・・」

コナン「まあ銀行強盗やら何回かやりあつてつから。それに、ガキの『じゅーじゅー』こと一回あつたし。」

元太「ガキのころ? なにいつてんだオメー。」

光彦「 いまだつて、がきじやないですか。」

歩美「うんうん。」

コナン「ま、まあいいじゃねーか・・・ははは」

灰原「まあ、とりあえず現場待機しかないわね」

東尾マリア「あ、ドアの向こうに変な人があんで！」

小林「きっと例の不審者だわ！みんな、さがつて！」

灰原「で、どうするの？」

コナン「キック力増強シユーズはねえけど麻酔張りはあつかうつちこむ」

そういうとコナンは不審者にちがずくと麻酔張りをうちこんだ。

不審者はそのままねむってしまった。

そこへ、警察が到着し、不審者はお繩についた。

はじまりやつたね・・・(前書き)

まじめじゃなかったね・・・

不審者騒ぎのせいでその日の学校はなくなつた。

俺たち少年探偵団は歩美たけに無理やりつきましたわされ、博士の家で、いつも場合の対策を考えることになつた。

今はその博士のひつ。

もひつ口が暮れぬひつ。

5時半。

「ナン」「おこ、オメーうわうわうかえつたほひがいいんじやねーか？」

光彦「わひですね。もひつ口も暮れできましたし。」

ピンポン

光彦がわひこいかけたときだつた。

博士の家のチャイムがなつた。

博士はだれじや?といつ顔をしながら玄関にむかつた。

ドサッ

いやな音が玄関のほうからした。

それとビビリに、博士の「いめき声」も。

博士「うわっ！……」

「ナン」「博士！？」

歩美「な、なにがあったの？」

「ナン」は急いで玄関にむかつた。

そこにはみたくもない光景がひろがっていた。

なげりれて氣をつしなつてる博士。

その田の前には拳銃をもつたジンとウォッカ。

「ナン」「ジン……ウォッカ……」

哀「うそ……」

灰原はその場でしゃがみこんだ。

玄関に駆けつけた歩美や光彦やげんたもいい状況でないことはわかつた。

光彦「は、かせ？」

げんた「だ、だれだよオメーラ……？」

「ナニ、おぬせがつてゐる。」

コナンがさけんだ。

だが、歩美達はなぜか恐怖でうごけなかつた。

そのときサイレンサーつきの拳銃が火花をちらした。

同時に、カンは足に激痛を感じた。

その間、ナムは倒れこんだ

二十九の足が三十九が打
力弾をおひかの力

۱۱

歩美「「ナンくん！...！」」

歩美はそういうとコナンにかけよつて、コナンに話しかけた。

歩美一だ、大丈夫?』

コカンーあ、ああ、これぐらいいじや死なねーよ……」

そこへしながらモニカは苦痛で眉をしかめる。

その後、けんたと光彦も二ナンにかけよってシンたちにいた。

光彦「なんなんですか！？あなたたち！？」いきなりうつたりして！

「...」

ウォッカ「だまつてそのメガネのガキとシェリーをわたせ!」

歩美「しぇ、シェリー?」

げんた「だれだ?」

光彦「とにかく、コナン君は渡しません!...!...」

ウォッカ「いまなら、そのガキを渡すだけでオメーらをみのがしてやるぜ?」

光彦「いやです!...!...」

コナン「み、光彦、に、にげる!」

歩美「じゃあコナン君のかわりに歩美がいくからコナン君を病院につれてつて!」

ウォッカ「そんなのが聞けるとでもおもつてんのかよ?」

そんな中、なきそうな顔をした探偵団たちとは裏腹に、

コナンはかぐいをきめたような顔をした。

コナン「大丈夫。この人達俺の知ってる人だから。ついていけばなんもされねーよ。」

歩美「で、でも」

コナン「肩かしてくればあるけつから。げんた、肩かしてくんねーか?」

コナンはつくり笑いをしながらいつた。

光彦「く、車にのればいいんですね・・・?」

ジン「・・・ああ・・・」

光彦「じゃあ僕たちものつます。それでいいですか?」

歩美「そうよ!あたしたちコナン君の友達だもん!」

げんた「そーだぞ!」

ウォッカ「ならはやくのれ!」

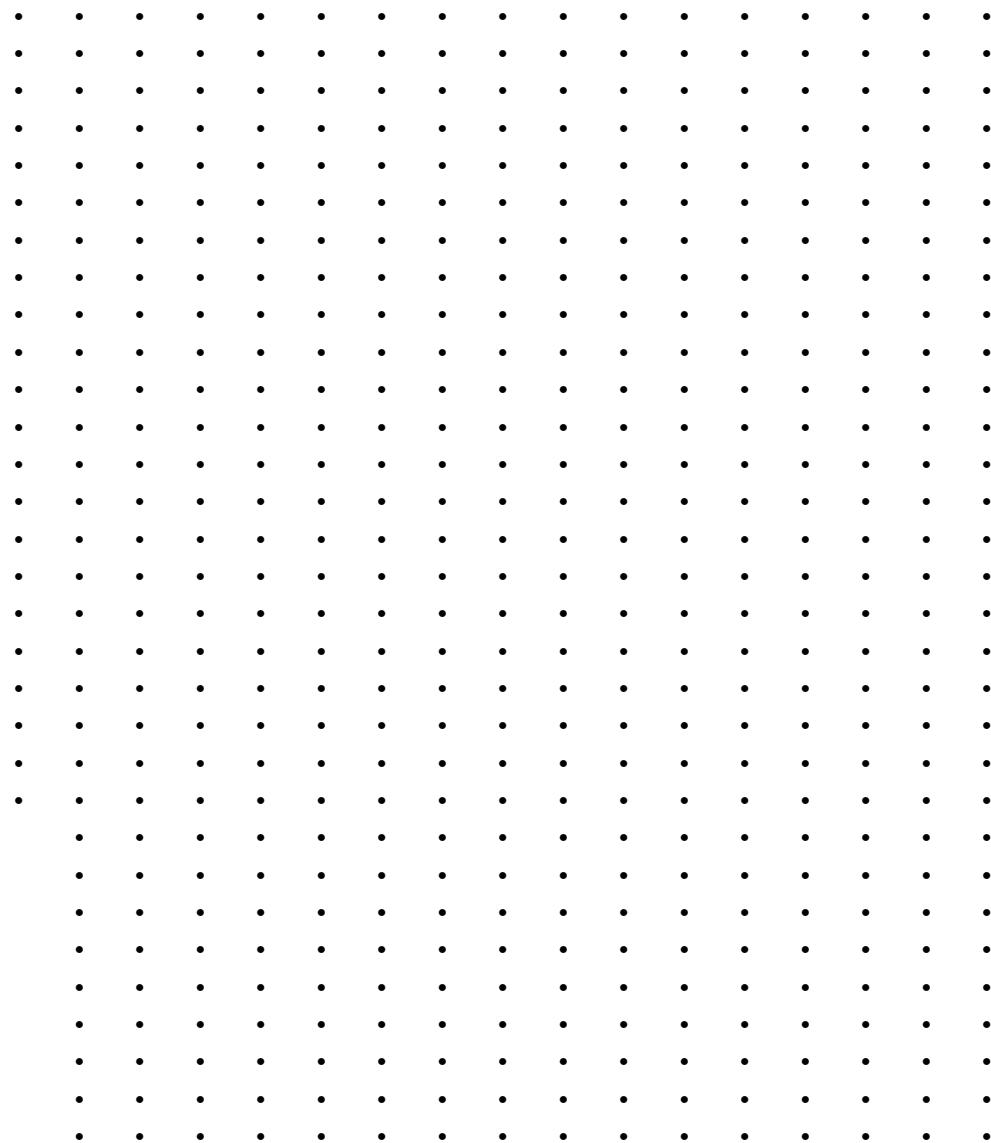
ウォッカがそうこうと歩美達はぞろぞろとポルシェに向つた。

さつきまではふるえがとまらなかつた哀も、覚悟を決め、車内にはいつていつた。

その後コナンもウォッカに無理やり体をおいたせられ、車の中にほ織り込まれた。

まじめがつたね

(後書き)



しゃべんなによだれ (前書き)

しゃくしゃんなによだあ

「ナン達をのせたポルシェは今、どこかの車庫で停車していた。

光彦「大丈夫ですか……？」ナン君……？」

「ナン」「ああ……これくらい、ハアツしてやしねーよ、ハアツ」

哀「まるわかつよ。無理してるつて。」

「ナン」「とにかく、今やつらがいねえすきに、じつにかしなくちやならねえけど……」

「ナンはそれからおおきへため息をついて自分の体をみおろした。

その小さな体はロープで手足をきつて固定されていた。

もしかりん他のメンバーも。

歩美「あたし達、死んじやうのかなあ……」

哀「今はまだ大丈夫よ。」

歩美「え？」

哀「江戸川君を殺さずつれてきた理由はひとつ。APT-X4869の大事な服用者だから。おそらく、江戸川君のデータなどを利用して私に完璧なAPT-X4869をつくるのがねらいだろーから。完成するまではあなた達は江戸川君と私が抵抗しないための保険。だから薬ができるまで大丈夫よ。あとは私がなるべく研究を遅くするから。あとは江戸川君がたえられるかどうかね。」

光彦「APT-X4869？」

げんた「なんだそれ？」

歩美「コナン君がその薬を飲んだ？」

コナン「事情はあとで説明するよ。問題は脱出方。さいわい武器はあっから、奴等のめをぬすんでどうにかしてやるよ。」

光彦「わかりました！」

歩美「コナン君もよく分かんないけどがんばってねー。」

げんた「たのんだぞー。」

コナン「ああー。」

哀「ジン達がもどってきたわー。」

しゃべんなによだめ (後書き)

A large grid of black 'X' characters on a white background, arranged in 20 rows and 20 columns. The grid is centered and covers most of the page.

A large grid of 'X' characters, arranged in 20 horizontal rows and 20 vertical columns, creating a pattern of small 'X' marks across the page.

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4458y/>

名探偵コナン最終回～蘭に俺の本当の声で本当の言葉で～
2011年11月24日19時51分発行